新制化という二つの課題を議した間現代化」計画の調整と民主・法 79民代安大会が開幕した日(六月)の到着したのは、ちょうど全国人 一八日) であったが、「四つの 私が上海、西安を経て北京に 見てきわめて重要な意味をも ものであった。 とり中国のみならず、国際的 期第二回会議)も 民代表大会(第五 国の今回の全国人 が相次いだが、中 れにOPEO総会 東京サミットそ えに、そこに含まれている矛盾 転換を意味するものであるがゆ にとっての未曽有(みぞう)の は、要するに、「毛沢東思想」 にはいられなかった。その変化 の大きさをまざまざと実感せず それだけに、今日の中国の変化 回が三度目の訪中であったが、 沢東思想」が掲げられている を建国の理念としてきたこの国 もまた大きいといえよう。 まず第一に、依然として「毛 化する『毛沢 いま大いに人気を得ていること 年代初期に活躍した経済幹部が 社会主義建設そのものが問われ や指導者の発言に見られるよう であろう。 激な農業集団化以降のプロセ に、いわば一九五五年後半の急 けではない。最近の中国の論語 つつあることによっても明らか ス、すなわち毛沢東路線による (うかがい知ることができるだ | 四一波や||事橋といった五〇 東思想 脱新聞が出ていて暖(にき)わ は、例の『民主の母』に今日も が歴然とする。北京の母安街に ると、文化大革命そのものがい ばしばさしはさむのを聞いてい うなった……」という言葉をし かったーー」「文革によってこ に語りつつも「文革以前はよ 彪・「四人組」の罪状をしきり つある。中国側の当局者が林 のものもトータルに否定されつ まや、態の代名詞。であること はやはり本当だったように思わ そこでの華国鋒が自己批判を説 は一つの重要な結節点であり、 年十二月の中国共産党三中全会 鋒主席によって唱えられていた ローガンは、昨年後半まで華国 する者はもはやいない。このス に学ぶ」とのスローガンを強調 」とを想(おも)うと、やはり昨 旅行中、大寨方式の段々畑を

であり、そこには社会主義的が

のひとかけらも存在しない。

こうした逆転状況のなかで、

に帝王将相・才子佳人の出し物 を観(み)たが、これなどはまさ 四川省の古典喜劇「喬老爺奇遇 の五月から復活した。西安では

民衆のあいだには一部に「四洋

あった。

演劇や芝居も旧来のものが一

ではある幹部が「三百一包」政

策そのものを肯定するロぶりで

計度的保障へと転換させないかぎ

、中国社会の安定と発展はあ

ば急速に風化し、タテマエ化し

とはいえ、いまや「毛沢東思想」

や五七年の反右派闘争で「反党

てしまっている。このことはか

名な女流作家・丁玲女史の元気 作家」として失脚していった著

がガリ版刷りで出ていたばかり

『北京之番』の第五号、第六号

る」という大きな壁新聞が新た

一劉少奇同志に思いを寄せ

されたと報じられた反体制雑誌

っているが、そこには一時抑圧

つては全中国を席捲(けん)した

『毛沢東語録』に十二日間の旅

論なレベルから「人民民主」の制

国の社会主義建設を大衆闘争的 了回の全国人民代表大会は、中

配化という二つの課題を譲した

思換の主導者の一人が、かつての相

くものであった。こうした転 の得ないという深刻な反省に基

東北京市のリーダーで文化大茶命



あちこちで見かけたが、この间

そして「旧中国の顔」さえの言 かぶれ」「日本へのあこがれ」

が目につく。西安近郊のある人 遊が生えて荒れはてているもの れつつある半面、段々畑には雑 れた「三百一包」(自留地・自由 民公社で、かつて激しく批判さ 的な方式の欠陥がむしろ語ら う)、日和見主義など文革の後 労働人口の雇用問題ともからん 遺症もまた大きい。 いるところである。 の指導者自身がすでに自覚して とも自明であり、この点は中国 いうわけには簡単にゆかないこ で、現代化=機械化=省力化と や中堅幹部の意気沮喪(そそ 方、下放知識青年の非行化問題 いているような状況もあり、 四つの現代化」は、膨大な

めいているが、中国社会のこの クな旋回を遂げつつ城へうこ ともかく中国はいまダイナミ

のではないかと質問したところ 落しく動態的だといえよう。 圧倒的現実がはらむ矛盾もまた (東京外語大教授

風化

の文化大革命の高測期、七五年

あなたはいまどこにいるのです ジオは毎晩「敬愛する問総型、

らない。

る受難者であったといわねばな はなく、まさに毛沢東路線によ 幹部はけっして文革の犠牲者で も知ることができる。これらの 真入りで出ていることによって な姿が『人民日報』の紙面に写

ょう」との私の質問に、ある絵

政策が実質的に復活している

市場・自主採弊制へ三百〉と歴

薬生産の個別精質へ一包と

一型少奇の名誉回復も近いで に貼(は)り出されていた。

私にとっては、一九六六年秋

批孔」週町の時期に次いで、今

ているといった民意にそれを別

るだけに、もはや文化大革命そ

の名残としての「魔菜は大狐

人民公社を訪れても、文雄期 はうなずいていた。

こうした状況が底流に存在す

か……」との時を切々と明読し

月の「四人組」による「批林

るのがある。

氏であったことも、印象深いも

と、天安門前広場の毛主席記念 行中一度も出合わなかったこ

選をもはや訪れる人もなく、ラ

の重要な郷権対象となった影真

との答えが返ってきたが、北京 三自」は復活させてもより